自治労京都市職 25 年周年記念」パネルディスカッション

25 年の歩みと、これからの労働組合

挨　　拶

篠原輝雄（自治労京都市職中央執行委員長）

司　　会

高橋直樹（自治労京都府本部執行委員長、元自治労京都市職書記長）

パネリスト

羽室　武（京都市職員退職者会顧問、元自治労京都市職中央執行委員長、元連合京都会長）

北本　勤（京都市職員退職者団体協議会会長、元自治労京都市職中央執行委員長）

木村幹雄（京都市職員退職者会副会長、元自治労京都府本部執行委員長、元連合京都会長）

橋元信一（連合京都会長、元自治労京都市職中央執行委員長）

開催にあたって

篠原　今日は、お休みのところ、「自治労京都市職結成 25 周年記念事業」にご参加いただき、誠に有り難うございます。あわせて、この 25 年の長きにわたって、自治労京都市職の運動を支えていただきました組合員および諸先輩方、関係諸団体の皆様に、心より感謝申しあげます。

今日の「記念事業」は、2 部構成で進行しています。第 1 部は、「世界の戦場から平和を考える」と題した、戦場カメラマンの渡部陽一さんの講演です。現在、日本は、安倍政権の強権的な政治手法によってさまざまな法改正がなされています。「憲法」の改正議論を推し進めようと、安全保障関連法を強行採決し、それによって「駆けつけ警護」を含めた戦闘行為が可能となった陸上自衛隊が、南スーダンに配備されました。いよいよ日本も、戦争の可能性が現実味を帯びてきたと言わざるを得ない状況になっています。

そのようななかで、実際に世界の戦場を目の当たりにしておられる、渡部陽一さんのお話を伺うことで、戦争のもたらす悲劇や、苦悩、そ

して、平和について、改めて考えるきっかけにしたいと考えました。

第 2 部は、「自治労京都市職 25 年の歩みとこれからの労働組合」と題して、羽室初代委員長をはじめ諸先輩の方々に、パネルディスカッションをお願いしました。結成時の苦労話や裏話、また、今後の運動の在り方について、御示唆いただければと思います。

自治労京都市職は今年で結成 25 年を迎えました。25 年を迎えることができたのは、諸先輩方の苦悩や血と汗のにじむ努力、さらに組合民主主義を貫くための信念の結晶のたまものです。現在の、自治労京都市職の前進である「自治労京都市職労」が、従前の京都市職労に決別して結成されたのは、1990 年 3 月です。当初、十数名で発足したとお聞きしています。

その後、従前の市職労運動に疑問をもった当時の各支部が「京都市職連」を結成し、「自治労京都市職労」との合流をめざして統一準備会を発足。そこでの協議を経て、1991 年 2 月 8 日の統一大会で、現在の「自治労京都市職」が結成されました。

「なぜ、従前の市職労と決別し、苦難の道を諸先輩は選んだのか」。それは、組合民主主義を貫き、組合員ひとり一人が主人公である運動を展開するため、それが自治労運動であるからだと、私は理解しております。

現在、そういった歴史、経緯を知る組合員がどれだけいるのか。また、従前の市職労との組織闘争がもつ意味、そして、今も組織闘争は続いているという事実を認識している組合員が、どれだけいるのか。

結成から四半世紀を経た今日、改めて原点を振り返ることで、この運動の大切さを確認していきたいと思います。私たちひとり一人が、自治労京都市職の運動に責任をもち、さらなる前進を図るための、今日を第一歩としたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

なぜ、従来の組合と決別したのか

高橋　では、これから後半のパネルディスカッションを始めます。このパネルディスカッションは、篠原委員長の挨拶にもあったように、自治労京都市職のこれまでの活動を振り返ることで、これからの運動に活かしていこうと企画したものです。

登壇いただいている羽室武さん、北本勤さん、木村幹雄さん、橋元信一さんは、自治労京都市職を作った立役者の方々です。結成以後は、自治労京都市職の運動を担ってこられました。

私は、司会を務めさせていただく、高橋です。私が自治労京都市職の書記次長をしていた当時、「21 世紀の CHANGE（改革）& CHALLENGE（挑戦）」という組織方針を作成しました。そこには「今から十数年前、当時の京都市役所の労働組合は 1 つであった。しかし執行部の多数派を占める日本共産党支持グループは、労働戦線の統一過程を“右翼的再編”と中傷、連合結成に反対するばかりか、自治労に対する組織分裂を持ち込もうとしていた。そして自治労を脱退し、自治労連（自治省をはじめ政府からも正式な交渉団体とは認められていない共産党系の産別）への加盟をもくろむ日本共産党支持グループは、上部団体からの脱退は全組合員による直接投票が必要であるという、規程上で定められている民主的手続きを実施せずに自治労を脱退するため、自治労組合費の納入を保留するという組合員不在の暴挙に出ていた。そしてこの状況をそのまま放置すれば、“連合”結成という労働組合の全国的な官民統一の流れに反し、やがて連合はもとより自治労からも脱退することとなり、全国的にはきわめて少数である共産党の指導に

よるナショナルセンター（全労連）への道を進まざるを得なくなっていた」と書かれています。それが当時の状況です。

そういうなかで、1990 年 3 月 13 日、こうした状況に決別し、自治労に留まり、多くの自治労の仲間と連帯するため、羽室さんを先頭に、自治労京都市職労を発足させました。当時、京都市役所には「市職連」という、もう一つの組織も発足したのですが、1991 年 2 月にその組織とも統合し、約 3200 人の組合員を有する、現在の自治労京都市職を結成しました。そういう決断をしなければ、私たちはそのまま自治労連に入ってしまっていたところです。

当時、私は 30 歳くらいでした。羽室さんから「高橋君、自治労京都市職労という組合をつくるから入ってくれ」と、単刀直入に言われました。支部の組合員は中央情勢にはあまり関心がなく、自治労と自治労連の違いがわからない人が多かったため、組合員への説明には苦労しました。担当していた区役所の 1 階フロアーを、お願いに回りました。組合員には「高橋が言うのだから入ってやろう」と言ってくれた人が数十人いました。私は、私の言葉だけを信じて入ってくれた人たちを、どんなことがあっても守っていかなければならないと、その時、心で誓いました。それから私の組合運動が始まりました。その経験がなければ、多分、今の私はないと思います。本当に貴重な経験をさせていただきました。

では、パネラーに、自己紹介を兼ねて当時の思いを語っていただきたいと思います。最初に、当時、執行委員長の大役を果たされた羽室武さんにお願いします。

羽室　日本の労働者が、共産党の影響力から脱し、「自分たちの労働組合をつくりたい」と思ったのは、その時が 2 回目です。1 回目は 1947 年の「2・1 スト」。当時は、共産党の指導に基づく労働運動を展開していましたが、その反省から、共産党の単独支配を断ち切るため、共産党の多くのメンバーと、労働組合にかかわっている方々とで民主化同盟（いわゆる民同）を結成しました。

2 回目は、社会党が少しずつ衰退していくなかで、共産党が労働組合を自分の支配下におこうと、統一労組懇(統一戦線促進労働組合懇談会)を発足させました。当時の、京都市職労や自治労京都府本部は、共産党の方針に忠実で、自治労から決別して別の労働戦線を構築すべく活動していました。京都市職労で役員をしていた私は、文字どおりその方針に従うかどうか選択を迫られました。

分裂がもはや全国レベルでは止めることができなくなる段階で、京都市職労だけは中立等の第三の道をとることができないかと、当時の書記長と話をしましたが、結果は駄目でした。彼は「羽室さん、わかってくれ。神戸市職であれば別の選択はあるけれども、名古屋や京都などは、そういうわけにいかへんのや」と。つまり、共産党支持勢力としての労働戦線づくりに、愛知や京都がどうしても必要だということです。

それで、これではどうしようもないということで、競争選挙をやりました。結局負けてしまい、最終的に新しい労働組合を立ち上げたということです。

高橋　有り難うございます。続きまして、結成当時は書記長、その後は委員長を担っていただいた、北本勤さんにお話をうかがいます。

北本　結成に至る経過は、羽室さんが言われたとおりですが、少し具体的にいうと、1990 年 3 月 13 日に結成した組合の名前は、「自治労京都市職労」です。現在と名前が似てますが、最後に労働組合の「労」が付いていました。まったくの手さぐりで結成したため、準備段階から多忙を極めました。当時、賛同していただいた方

々と毎日、夜まで議論をしました。私は、書記長として実務を担っていたので、書類の作成や、当局との事前折衝など、具体的な仕事が山積みで、土・日も祝日も返上して奮闘しました。

結成した次の日には、市人事委員会登録をしました。当時の書記局は、市役所の中にはなく、河原町夷川西のビルの一室に構えました。結成してすぐに当局へ要求を出し、それがかなって書記局を市役所の中に開室したのが、1992 年 6 月です。今の建設支部の部屋です。当時の建設支部は地下にありました。

結成してからは、組合員の加入拡大のため、加入届を書いてもらう作業に追われました。執行部全員で、各支部や職場にオルグに回りました。「市職連」と統一するときには、1600 人ほどの組合になっていましたので、「市職連」の 1600 人と合わせて 3200 人で、今の「自治労京都市職」を結成しました。

高橋　次に、木村幹雄さんにお話をうかがいます。木村さんは、結成時、伏見支部の支部長をされていて、その後、自治労京都府本部執行委員長、連合京都会長を歴任されました。

木村　再建した当時、伏見支部の支部長として、自治労再結集に向けて苦心していました。

できるだけ多くの支部組合員に自治労へ結集してもらうため、とくに支部財産の処理では、組合員みんなの財産ということで、何とか伏見区役所の職員厚生会にそれを移管し、支部組合員が円満に自治労に結集できるよう、支部大会を準備しました。しかし、その大会議案は否決されてしまい、自治労結集を訴える支部役員は立ち往生の状態となりました。

一組合員として自治労に結集することは可能でしたが、当時の羽室委員長からも「できる限り多くの組合員の結集」を求められており、再度、支部大会を開き、一度、否決された財産処分の議案を再度、提案することはできませんでしたが、可能な限り、組合員が自分の意志でナショナルセンターを選択できるよう整理してきました。

支部執行部としては、労働戦線や共産党の問題について、組合員に充分説明してきたつもりでしたが、組合員は職場の混乱の方を心配した人が多く、結果、自治労は少数派での発足となりました。しかし、京都で自治労運動を作り上げていかなければならないとの思いから、その後、退任するまでの約 20 年間、府本部、連合京都の役員として、労働運動にかかわらせていただきました。

高橋　それでは、最後に、元自治労京都市職委員長で、今は連合京都会長として活躍されている、橋元信一さんにお話をうかがいます。

橋元　私は建設支部出身です。市の職員に採用されてすぐ、本庁の地下にある建設支部につれていかれ、「名前を書け。ハンコを押せ」と言われました。それが逆に嫌で、いったんは拒否し、1 年ほど組合には入りませんでした。しかし、ある人から「なんで入らへんねん」と言われ、「ああいうやり方が気に食わん」と応えたところ、「気に食わんのやったら中に入って文句言え」と言われて、それなら入ろうと組合員になりました。

当時、京都市役所内にラグビー部がありました。今は低迷していますが、当時は関西Ａリーグに所属しており、全国社会人大会にも出場するチームで、私はラグビーの選手をしていました。組合運動よりそちらの方が中心でした。そうこうしているうちに、自治労京都市職結成の

動きが出てきました。当時、建設支部には 700 人くらいいましたが、自治労系が 8 割くらい、あとの 2 割は共産党系でした。建設支部では、臨時大会を開き市職連を結成しました。組合員からは、「なんで組合が別れるんや」という声がありました。

当時の建設支部の 4 役の方々は、私以外みんなさん 40 歳代後半から 50 歳を超えていました。一見、怖そうな方々でしたが、労働運動に付いては、情熱の熱いものを抱いて、いらっしゃいました。

当時、市職連の結成について、よく呼び出しがありました、当時の建設局・土木事務所は、24 時間体制でしたから、時間に関係なく、「事務所に来い」と呼び出されたり、飲んでいる店から「こっちに来て説明せい」と言われたり、行くと泥酔していて話にならない。翌日、事務所に行くと「お前、何しにきたんや」と言われる。そんな状況で臨時大会が開かれました。大会では、共産党系以外、全員が市職連への参加に賛同しました。

当時の建設支部は、政党に関与しない、右にも左にもいかない、真ん中を歩いていくという支部でした。それが、自治労に入ると、自分たちの働く条件なり、環境改善のためには政治の力が必要だということが、だんだんわかってきましたが、市職連から自治労に加盟してからも大変な作業でした。土・日も、職場・自宅にオルグに行きました。全国の仲間も、応援に来てくれました。オルグは、建設支部だけでなく、他局にも渡りました。家庭訪問したとき、「ピンポン」と鳴らしたら水をかけられたこともあります。

そういう経験をしながら、現在までできました。

高橋　有り難うございました。みなさん、結成当時からこれまで、さまざまな苦労をしてこられたことがよくわかりました。

私は、書記長になってすぐ、自治労不祥事問題が起き、連日、新聞報道されました。そのことでいろいろな職場から呼び出され「お前らも何かしているやろ」と、散々非難されました。忘れもしません。ある職場では何時間も監禁されました。今となってはいい思い出になりましたが、そんなこともありました。

その他にも、賃金カットや、公務員の厚遇問題で議会対応に追われたりもしましたが、その一方で、中京支部、右京支部、教育支部などを立ち上げました。支部ができたときは、本当に嬉しかった記憶があります。教育支部を立ち上げるときには、今の門川市長も総務課長としておられました。

そんな思い出を、今度は橋元さんからお願いします。

苦労の連続だった設立への道

橋元　私はまだ現役の連合会長ですが、会長を経験された羽室さんや木村さんの背中を、これまでずっと見てきました。自治労は、行政の職員としていろいろな政策に通じていますから、さまざまな政策提言ができます。これは、労働運動にとって力強い見方です。

私は、自治労京都市職の委員長も 10 年、経験しました。自治労から、政府の情報が即座に入ってくるため、当局へ素早い対応ができました。確定闘争では、当局に対して「今、こういう情報が入っているがどうなのか」と言うことができました。共産党にも情報は入るんですが、自治労よりも遅れるため、対応も遅れる。北本さんが委員長を退かれる頃には、自治労が確定闘争の主導権を握っていました。当局に対して「今年の確定はこれでいく」「ここは引けない」と言えた。自治労には、政府に交渉する力があって、すごいなと思いました。

今、組合の組織率が低下しています。会場の組合員のみなさんにお願いしたいのは、一人でも二人でも、組合員を増やしていただきたい。非組合員への対応は非常に難しい問題ですが、対話を重ねて、組織率を上げることを考えていただきたいと思います。

木村　自治労市職の役員は短いですが、約 20 年の専従役員期間では、思い出があり過ぎて困るほどです。事件としては、私が連合京都から府本部委員長として戻った 2001 年に、自治労不祥事問題が、そして次の年は、連合京都の政治団体の不適正経理が発覚しました。

府本部執行委員長時代には、自治労長期共済の全労済への移管問題が起こりました。これはすでに受給されている年金給付額をも減額する厳しいものであり、共済役員の立場からも大変苦しい提案でした。

また、連合京都の会長をしていた 2008 年 9 月にリーマンショックが起こり、製造業関連の労働組合を中心に一次帰休や一斉有給休暇取得でラインが止まり、多くが工場閉鎖になっている状況でした。とくに非正規労働者へのしわ寄せが著しく、雇い止めなどが社会問題としてマスコミなどに取り上げられており、翌年の春闘時に舞鶴で街頭宣伝をしていたとき、退社する非正規労働者から「何が組合運動や。お前ら、当局と一緒やないか。ワシらのクビを切っとるのと違うか」と罵声が飛んできました。その時は、さすがに日本の労働組合は、日本経済とともに潰れるのではないかと思いました。

マイナスの話ばかりになりましたが、プラスの話では、民主党政権の誕生にも立ち会わせていただいたことです。20 年の間に、いろいろ貴重な経験をさせてもらいました。

北本　一番の思い出は、連合に結集する労働組合を、羽室さんを先頭にしてつくったことです。大変苦労をし、多忙を極めましたが、いわば歴史の一ページをつくったことで、充実感、達成感を味わうことができました。私自身は小さな歯車にすぎませんが、それでも一つの歯車としてかみ合うことかできたという喜びがあります。

疲れていても、加入届が 1 枚ずつ増えることが一番の慰めになりました。毎月、チェックし、今月は何枚集まったと確かめる。加入届が束で届けられると、無償の喜びがわき上がりました。3200 人が結集し、ピーク時は 3600 人になりました。お聞きしたところ、現在は 2800 人だとか。当時と比べて 800 人も減っています。もちろん職員数自体が減ったことも影響していますが、危機的な状態です。

一番悲しかったのは、書記次長をしていた土屋君という、バイタリティ溢れたエネルギッシュな人が、享年 43 歳で亡くなったことです。これには打ちのめされました。これまで、役員経験者で、現職で亡くなられたのは彼だけです。もう土屋君のことを知っておられる方は、ほとんどおられないと思いますので、あえて紹介させていただきました。

羽室　私は、連合京都の会長を 3 年間やりましたが、そのうち 1 年は、府本部委員長と兼務しました。その間、「京都連合」という開店休業状態の政治団体にかかわって、所得税の還付を受けるという事件がありました。

私は、「京都連合」について 1 度も説明を受けておらず、しかも連合京都会長の私がハンコを押したのも、3 年間で 1 回しかありませんでした。連合京都が坂を上っているとき、連合京都を中傷するために、誰かが「京都連合問題」を仕掛けたと思います。

新しい労働組合は、自治労に加盟するだけでいいのか、どういう労働組合をつくっていくのか真剣に考えなくてはいけないと思いながら、活動しました。自治労は、従来、社会党の支持団体でしたが、社会党が政権に近づくということもなく、少数派のままでした。新しい労働組合は、労働者の立場に立つだけでなく、すべての人たちに「これは正しいんだ」と言える方針をもって活動していくべきではないかと思って

います。そういう運動をする労働組合に生まれかわれるようにしたいという思いが、自治労設立に対する決意であったことを思い出します。

現在の労働組合に思うこと

高橋　有り難うございました。ここで会場からいくつかの質問をいただいています。

その一つは「なぜ組合は別れなければならなかったのか。組織率が低下していますが」。もう一つは「組織闘争＝対共産党の構図となっています。共産党との違いを教えてください」という内容です。こういう質問を見ると、結成から 25 年たって、当時の結集軸が見えずらくなっているのではないかと感じます。今の労働組合について、羽室さんはどう思われますか。

羽室　労働組合のありようは、いろいろあると思います。職場にいくつもの労働組合があって、ストライキをする時にはお互いが協議し、組合に入ってない人も含めてストライキを展開するという労働運動をやってきたのがイタリアです。また、他のヨーロッパの国では、組合の組織率は十数%ですが、ストライキは非組合員も含めて突入する国もあります。組合運動のあり方はいろいろあるわけで、労働組合は一つである必要はないと思います。

ただ、日本共産党は、いろいろな場面で誤ちを犯してきました。労働組合運動に対しては、共産党の方針に基づく活動をさせようとしたことが、戦後、2 回ありました。その 2 回目が全労連運動です。労働組合員が共産党員であることは何の問題もありません。したがって、全労連の方々が、実情に応じて考えていこうと思われたら、いつでも一緒になるべきだと思います。そう思わせるような活動を、自治労はしていくべきだと思っています。

北本　厚生労働省によると、自治労京都市職が結成された 1991 年の労働者の組織率は 24.5 %でしたが、2015 年は 17.4 %と、7 ポイントほど下がっています。正規雇用が減ってアルバイトなどの非正規雇用が増えた影響もありますが、組織率が低下している。

自治労京都市職でも、新規採用者の加入届がなかなか上がってこないとお聞きしました。私は、組織戦争をすることによって体力がつき、本部と支部が一体となって、要求を勝ち取ることができたと思っています。今は競争する意識が薄れてきています。そういう意味では、積極的に打って出る環境もつくるべきかと思います。

本部運営もなかなか厳しいとお聞きしました。支部の体制も含めて、今一度、見直す必要があると思います。例えば、本部役員はいろいろな部署から出ていただき、意見や要求を、本部で集約する必要がある。現在は、特定の支部が無理をしながら本部役員を出しているように見受けられます。いろいろな支部、現業、非現業、さまざまな年齢層、男女を問わず結集できるような工夫を、ぜひとも考えていただきたいと思います。

木村　労働組合の現状には、私たちが反省しなければならないことがたくさんあります。連合は、2002 年に組織率が 20 %を切るのではないかという危機感から、「労働組合とはどうあるべきか」を提示するため、中坊公平さんら外部委員を交えて評価委員会を作りました。

評価委員会の結論としては、組織率の低下を乗り越えるためのポイントとして、本工主義からの脱却、パートなどの非正規雇用の組織化であるとしました。こういう運動の方向は間違っていないと思いますが、それでも今日まで組織率は下降の一途をたどっています。非正規の組織化も必要ですが、あわせて不安定雇用を無くし、正規化をすすめる法制度確立を考えていかないといけないのではないか。その点が、我われの不足していたところのように思います。当時の評価委員会からは、「恐竜の道をたどる労働組合」と指摘されました。言い得て妙です。図体は大きいが、滅んでいった恐竜。組織率低下に歯止めをかける取り組みを、さらに一歩突

っ込んで取り組んでほしいと思っています。

橋元　全国の労働者の4割が非正規労働者です。年収も200万円以下。生活が苦しく、結婚もできない状況です。この状況は、小泉純一郎首相による規制緩和から始まり、さまざまな職種に拡大されました。

当時、私は自治労京都市職にいましたが、非正規雇用の方はいませんでした。ところが現在、公務員でもたくさんの非正規職員がいます。そういう方々の働く条件を考えることが、キーポイントだと思います。そういう方々とともに組合運動をしていけば、大きなうねりが出てくるのではないかと思っています。非正規の組合員は、有期雇用ですから、半年から1年で脱退されます。しかし、また他の部署へアルバイトで戻ってこられます。そういう方々の思いを組合運動に取り入れるなど、多岐にわたる目線で考えていくことが必要です。

これからの自治労京都市職へ

高橋　それでは最後に、今の自治労京都市職を担う方々へ、メッセージを一言ずつお願いします。

橋元　一言でいうと、組合員の一人ひとりと、どのように向き合って行くのかを考えることだと思います。たまには原点に返ることが必要です。あわせて、連合への結集をよろしくお願いします。

木村　自治労京都市職の組合員は、市民からすれば労働者である前に行政マンです。そうした自治労京都市職が自らの政策をもち、京都における中心的な組織として、社会的な影響力を発揮していただきたいと思っています。社会的なニーズに対応できる組織として、組合員のみならず、市民の信頼に応えられる組織であり続けることを、お願いしたいと思います。

北本　年金の支給開始年齢が延びたことで、退職してもすぐまた、どこか再就職しなければならない実態があります。この問題を、法的な対応を含めて考えていただきたいと思います。また、退職後は退職者会に結集していただきたいのですが、なかなかうまくいかない。退職者会の悩みです。現職の時はしっかり頑張っていただいて、退職後は、ぜひ退職者会に入ってください。

羽室　自治体職員になるのはなかなか難しいため、採用試験専門の塾に通う人がたくさんいます。その塾では「役所に入っても労働組合に入らない方が、後々いいのではないか」と教えているそうです。それを鵜呑みにしている人がたくさんいる。しかし、みなさんも経験されているように、市民税の仕事だけしか知らない職員でも、組合の支部の役員をしていると、市役所全体のことが、おぼろげながらもわかってきます。京都市のまちづくりについてもわかるようになる。そういう状況も含めて、塾の反組合という洗脳を解き放っていただくようにお願いしたいと思います。

高橋　有り難うございました。今日は、自治労京都市職の知らなかった面を、少しでも知っていただこうと企画しました。25 年間、いろんな場面を経験し、いろんな思いでこの組織をつくってきました。そして、そこにはいろんな物語があります。

自治労京都府本部には、現在、約 7000 人弱の組合員がいます。これまで、その半分は自治労京都市職だと言ってきましたが、最近は半分を切りつつあります。寂しい限りです。組合員が増えるということは、職場で組合活動ができているという証しになります。そういう意味でも、組織の拡大に向けて、府本部も協力させていただきますので、よろしくお願いします。

今日は 25 周年を記念したパネルディスカッションでしたが、これから先、50 年、100 年に向けた出発の年とし、今後の自治労京都市職の発展を祈念して終わりたいと思います。有り難うございました。